

◎シリーズ 長岡京歴史散歩

109

光明寺と石棺

西山浄土宗の総本山である光明寺は、紅葉の季節ともなると数多くの観光客が訪れ、日ごろは静閑な境内も大きなにぎわいをみせます。総門を入って長くて緩やかな参道を通り抜けると、前方に御影堂と阿弥陀堂の壮大な伽藍が目に飛び込んできます。御影堂のすぐ東側に「円光大師の石棺」と称するものがひっそりと置かれています。円光大師とは、浄土宗の宗祖である法然上人のことで、光明寺には火葬跡や御廟など法然ゆかりの古蹟がいくつも所在しています。伝承によると、法然の遺骸は当初東山大谷の地に埋葬されましたが、比叡山の衆徒が破却しようとしたので、太秦の広隆寺を経て光明寺のある栗生野に移され、荼毘に付されて廟堂が建立されたといわれています。その

際、法然の遺骸を納めた棺が先の石棺だということです。

この石棺は、別個の石棺部材を上下に組み合わせたもので、ともに竜山石という兵庫県の高古川流域で産出する凝灰岩で造られています。石囲いされているために詳しく観察することはできませんが、蓋にされた部材は長さ約200cm、幅約80cmと小ぶりです。二方に縄を掛けるための短い突起が付いています。類例が非常に乏しく、舟形石棺あるいは家形石棺ともいわれ、解釈の分かれる特異な形態をしています。一方、棺身にされた部材は、長方形の石材の中央を刳りぬいたもので、長さ約177cm、幅約90cmとこれも小型品です。この部材は、光明寺に残る古文書によると、江戸時代の中ごろに京都にある高槻藩の屋敷から持ち込まれたものであることが明らかになっています。

▲円光大師の石棺

これらの石棺部材は、もちろん法然が生存した鎌倉時代のものではなく、古墳時代に造られたことは確実です。それではなぜ、そのような石棺が円光大師の棺とされたのでしょうか。それは、法然の霊所であることを根元とする光明寺にとつて、石棺は廟堂などとともにその権威をより一層高めるために必要不可欠なものだったからだと考えることができます。

